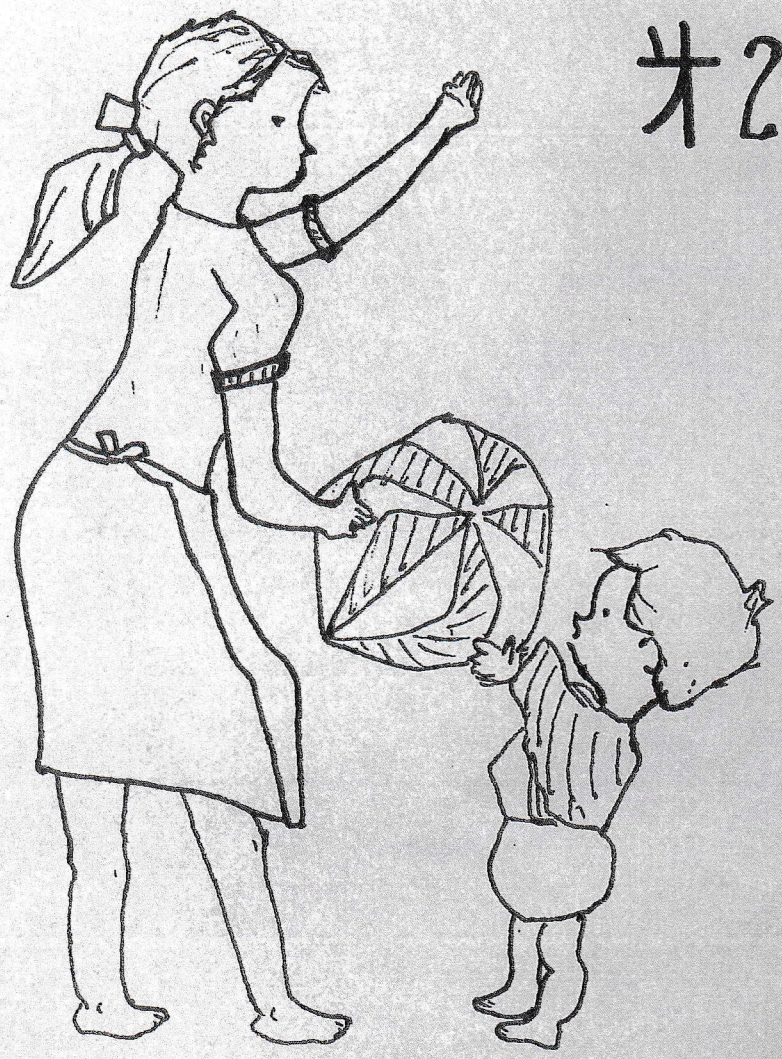
贈呈

むぎ

第20号



発行 女性史サークル

女性史サークル
120

もくじ

秋の旅五句……篠崎星歩 1
つぎの時代をつくる人々「わく外れの子」のなかから……P・Q 2
子供のうたうた……田中綾子 5
女性史へのアプローチ……谷本純子 6
ことばと活字―無責任なおしゃべりの反省―……影山澄江 7
出版後のあれこれ……阪本敏子 10
女性のつぶやき……今井由紀子 12
「ひめを変える」主体として―歴教協第二八回全国大会第一分科会での報告―……二宮敏子 14
北見女性史研究会の誕生とその後の活動……北見女性史研究会 18
女性史サークルに入って……田中綾子 20
愛媛女性史と私の三〇年―第二回労山四国ブロック「女性の集い」―……川又美子 21
女性史サークルのあゆみ（一九七四年二月～一九七七年二月）……38
火曜会のあしあと……52
友をもとめて……54
あとがき……山本紀

秋の旅五句

篠崎星歩

慶州にて

石に彫り秋の虚空に建てし塔

秋風嶺にて

西は百済秋風嶺に日が落ちる

扶余にて

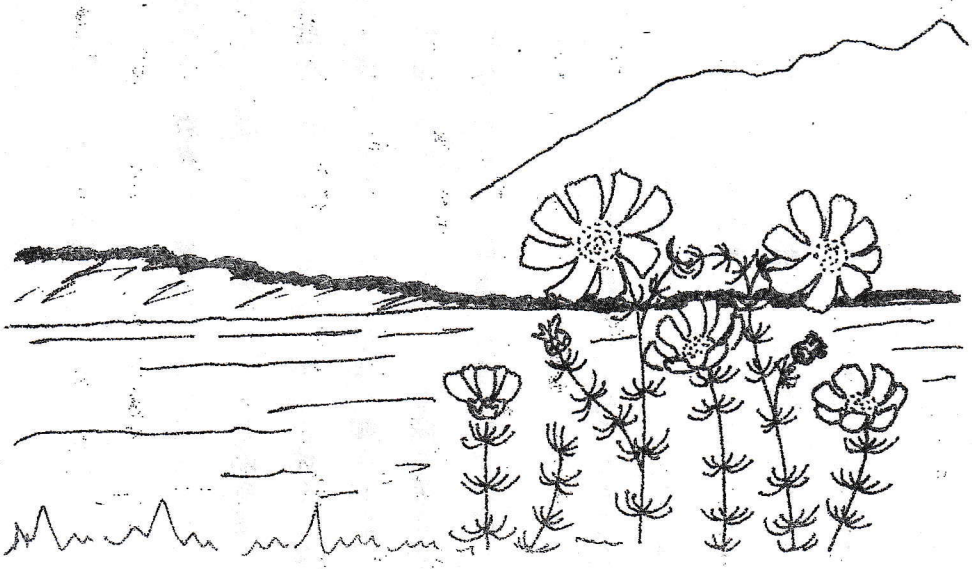
金冠の王国いまはコスモスの邑

白馬江にて

稲が熟れ童子と牛が夕焼けて

利川にて

秋雨に炎高麗青磁碗



つぎの時代をつくる人々は、
「わく外れの子」のなかから

P・Q

わく外れ〃というのは〃落ちこぼれ〃というのと大巾に違った意味ですが　一寸　ニュアンスを違えたつもりです。

〃落ちこぼれ〃というと　何だか〃自然現象的に　こぼれた。そういう子どもがあっても不思議ではない〃と感じられるおそれがあります。それは間違いで、正確には　〃落ちこぼした〃とか〃落ちこぼされた〃というべき場合が大部分だと思うからです。が　どちらにしてもその結果は、いわゆる〃学級のワクから外れた〃ことになるので　こんな我流語を使いました。〃はみ出しっ子〃といってもいいでしょう。以前は〃お客さん〃とインギンアレイアジョク的な言葉が使われました。

さて、昨年頃から　教育の問題が　マスコミを大きく賑わせてきました。市販テスト、業者テストと偏差値、学習塾、青少年非行、ついには　病気で学校を休んだ女子中学生の学業が遅れたと思い込んだ母親の親子心中、今日は　大学へ合格した息子が、入学金の準備に苦慮する親の姿を見て自殺した事件が報道されました。悲惨の限りです。

何故に　こんなにいろんな事が教育の場面で起るのでしょうか。一口でいえば〃エリートコース〃に進む（進ませる）ことが教育の最大の目的になっていることに原因があります。そして　過去、現在では　確かに〃エリートコース〃はそれなりに狙うねうちがあったのかも知れません。が　将来はどうでしょうか。

〝エリートっ子〟とは、テストに強い子のことです。テストに強いというその〝テスト〟はどんなしくみになっているのでしょうか。

第一にテストには出題の範囲がきまっています。たし算を習っているならその範囲、ひき算を習っているならひき算すれば出来る問題。子どもは本当の意味は分かっていなくても いまはひき算を習っているんだから二つ数があれば大きい数から小さい数をひいて答にすればよいと考えます。何故ひき算すればよいのかな などとは考えずに機械的に反応する方がよいのです。つぎに、きまった時間内に沢山できる程よい点になるということです。このことも深く考えることを妨害しています。第三に 一つの問題にいろんな考え方があっても たった一つの考え方に統制される傾向があるのです。子どもは、『一つの鋳型に入って、早く、沢山、問題ができる』ようにとし向けられています。

具体例を紹介しましょう。小→中→高→大の入試には出題範囲というものが定められています。その範囲外のことには一際眼をつぶって、ただひたすら 範囲内のことのみに頭を突込んで勉強します。さる有名エリート大学で小学六年生がやれる数学の基本問題を出したら とても不成績で、しかも〝奇問〟だと批判されたと出題者は云っていました。近郊の小学六年生、÷分数のときは、何故分母と分子を反対にしてかけ算をしたらよいのかその理由が納得できないので、÷分数の問題が出たらそれには手をつけないため点が悪い。これでは内申点が悪くなるだろうと母親はとても心配、どうしたらよいでしょう ときかれたことがあります。つぎは市内の例で、13ひく9の考え方。ある子は3から9をひくには6たらない、だから10から6をとる、残りは4、こう考えたら×になりました。3から9はひけない、10から9をひくと1あまる、これと3とでこたえ4、この考え方は○。この子どもの考え方も正しいのですが、ひき算に一つの思考形式しか認められなかったのです。

このような例は他にも沢山あるでしょう。こうした教育のなかからは、よく覚えていて、深く考えなく、速く

反応する子がテストに強く、エリートコースへ進み、よく理解してゆっくり深くいろいろな考え方をする子はエリートコースからハミ出してしまいます。未知なるものを発見する喜び、発見できなかったことのくやしさ、いろんな考え方があって他人の考え方を大切にすることの意味、一口にいえば学ぶことの楽しさ　を体験した子どもが育つ筈がありません。そんな子どもが全体を総合的に考え、根本に遡って創造する力のある人間になれる筈もありません。

自動車の排気ガス公害→電気自動車　と早い反応です。けれど電気自動車を動かす蓄電池をつくる鉛をどう処理するのか、重金属汚染と排気ガス公害とが結びついていません。ある工場のためにスバラしい機械を設計しました。どこからみても満点です、が　その機械が大きすぎるので　工場に入れる入れ口がないのです。その機械を装置するためには工場の建物を一度壊わさなければならなくなりました。また　ある工場で高性能の機械を導入しました。メーカーから担当の技術者が来て据えつけたのに動きません。三ケ月程かけネジ一本まで点検して何回組立てても動かないのです。原因は据えつけた場所が完全な水平面になっていなかったためと後になってわかり　ごく簡単な床の補修で機械が作動するようになったという事件もあります。あとの二つの例は関係者から直接聞いたことです。

こんな例を紹介するのも、つまりは　断片的な知識の〝つなぎ合はせ〟だけで総合的にいろいろ考えて見ることの大切さと、現行の教育のなかでは　それが育ってはこないことの危険を云いたかったのです。

ロッキード汚職で〝外国から金を取ったんだから日本には被害はない〟と考えている人たちがいるそうです。本当にそうでしょうか。政治家の道義的頽廃が社会に及ぼす取りかえしのつかない被害の他に、経済的な被害もわたしたち庶民が背負っている筈です。

〝ワク外れ〟というか〝ハミ出し〟っ子はエリートコースへは進めません。しかし、エリートコースへ進んだ子どもたちの多くは、将来　型に入った、創造性のない、

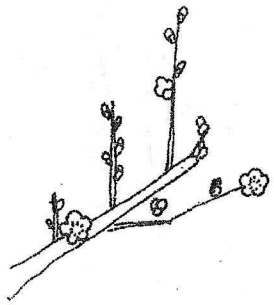
その場凌ぎは巧な人間になるでしょう。そうすると、地球的規模で根本的な大変動が起るであろう遠からぬ将来に、生き働き人類に役立つ人々は、現在の教育体制下での、いわゆる〝ワク外れの ハミ出しっ子〟のなかからこそ現われることは疑いありません。このような見方をどう考えられますか。

（一九七七年二月）

子どものうたうたう

田中綾子

先日、あるテレビの番組で、近頃の子どもはピンクレディーのうたやテレビマンがのうたしかうたわない。学校や幼稚園で習ううたをうたわなくなったのは困ったことだと言っているのを聞きました。確かに我が家を例にとってもしかりで、学校で習うものや、よく知られているはずの童謡すらうたいません。ピンクレディーやテレビマンがのうたばかりが子どもたちにとって魅力的だからなのでしょうか。ふと考えてみました。今の子どもたちの生活の中に、私がかってうたったうたがどこにはいっているだろうか、幼稚園や学校でちょっと習うだけのうた、家でも、友達の間でも、ましてテレビをひねってもどこにも流れていないうたが子供の間に浸透するはずがないのです。子どもにうたってほしいうたがあれば、子どもの生活の中にそのうたを流さなければいけないのではないでしょうか。そこで私も一児の母として、ピンクレディー旋風に圧倒されてばかりではいけない、がんばらなくっちゃあと思うのです。台所をしながら、おれ呂にはいりながら、あるいは子どもと一緒に買物に行く道すがら〝はあるよこいの〟とうたうことにしました。



女性史へのアプローチ

谷本純子

私と女性史とのつき合いは五年半になる。一九七一年九月から昨年の十月まで広島女性史研究会にせっせと通った。そして新しくこの松山で昨年の十二月より女性史とのおつき合いがはじまったのである。

広島で女性史の学習会に出た初めの頃は、井上清著『日本の歴史』のテキストを使い、月二回、参加者六～七名という状況の読書会だった。学習の方法は各自がそれぞれ分担して報告するという形式で、忙しいあい間をぬっていろいろ準備してくるのだろうと想われる人たちの姿に私は感慨深い思いがしたものである。会員はいわゆる〝専門家〟はいない、全んど素人ばかり。教師・公務員・事務職・労組書記・主婦等各層にわたるている。テキストはその後、エンゲルス著『家族私有財産及び国家の起源』・藤原彰著『体系日本歴史』第六巻・ベーベル著『婦人論』と休まずつづいている。又、時々その都度婦人問題関係の論論文・雑誌をとりあげて学習している。このようにして彼女たちを女性史へと学習させるのはなぜなのだろう、と働きはじめて間もない私は、自分が勉強するのだということよりもむしろこういう思いを強く持ちながら会に出席していた。

〝女性史は幸せな科学〟だと女性史研究家の伊藤康子さんはいわれている。自分たちの生活を守りきりひらこうと緊々と生きている、又、闘っている多くの人々、そういう〝国民の要求が自分を日本女性史研究にたずさわる専門家に育ててくれた〟というのである。〝自分とのかかわりをいやでも痛感させられるなかで生き方をたしかめざるをえない〟という彼女の研究の事業、だからこそ〝女性史は幸せな科学〟だといえるのだろう。

最近は除々に女性史研究がさかんになり、各地にサークルをみることができる。自分たちの歴史を自分たちの手で掘りおこし、過去のたくさんの人々に学び、つづっていくというこの仕事　多くの女性がとりかかりはじめ

ている。

私は、まだ"女性史は幸せな科学"だという内容が、自分のものとして明確ではないが、自分とのかかわりにおいて、多くの人と学びながら、一歩一歩あゆんでいきたいと願っている。

ことばと活字

—無責任なおしゃべりの反省—

影山澄江

その朝、彼は読みさしの新聞を無雑作に渡してよこした。指さされた記事を一読した時の私の驚きと不安たるや、脳天を思いきり殴られた時のような気分で、自分が何をしているのか、いつ子供達を登校させたのかさえはっきり覚えていない程の錯乱ぶりだった。

およそ、おしゃべりと長電話は自分の特権とばかり、それをフル回転して全活していた私の前に、落し穴が口を開けて待っていたのだ。つまり、長電話でおしゃべりした事が、数日後、活字になって表われたのである。この時ほど、ことばの大切さと、無責任なおしゃべりの罪深さを感じたことはない。自分のことばの使い方の至らなさ、語い不足、そこから生じた大きな過ちを見しみて感じ、恥辱と責任の重さにずっかり参ってしまった。

当日は、火曜会の日であったが、会合には行きたし、皆に合わせる顔はなしで、胸がキリキリと痛んだ。でも皆んなら理解してくれるかもしれない。自己反省して自分の言動をつつしもうと、サークルに出かけて行った。

もちろん、それは会員の方々への信頼と胸みを打ち明けられるという安心感があったからであり、ある意味では、自分への甘えであったのかもしれない。

ところで、問題の記事は、「高校受験の六章」と題したシリーズの最終回に関係者の声として一部掲載された

のである。弁解がましくなるが、電話取扱を受けた時、相手がどんな事を聞きたいのか、何を答えればよいのか等、はっきりせぬままに話を聞き、相槌を打ったりなどして、ダラダラと二十分位話したろうか。受話器を置いた時でさえ、自分がどんな話をしたのかさえ明確ではなかった。ただ、現在の中学生が、高校受験のためだけのように勉強に追いたてられている生活には、親としても黙って見ていられない。成績をとやかくいうより、友達づくりが大切な時期ではないか。精神的、肉体的に大きく成長する時でもあり、親から独立して、自分の悩みを友達に話そうとする傾向が大きくなる。友達を通して人間関係の大切さを学んで欲しいし、そのための部活動の良さを強調したように思う。

しかし、結果は、「子供を公立にやりたい」「能力のある子も、自分の特性に応じて積極的に私学に行くべきだ」などという、予旨した醒い親心をさらけ出してしまった。無論、現在の公立高校と私立高校の経済的負担差の大きさも思うと、我が家の経済状態では公立へ行ってもらはねばと思うのは、親の本音である。けれども、子供のおしりを叩いて無理に勉強させようという気はない。

問題は、「能力のある子も。」というところにある。私のおしゃべりでは、芸術分野などで、すでに自分の可能性を発揮しつつある子供が、私学へ進学することによって、よりその力を伸ばすことができるならという前提があったし、学校側も、当然受け入れにち全を期し、子供の特性が十分伸びるよう配慮しての事であった。

しかし、活字になったものは、『能力』というだけで成績を表わすような受けとられ方をされる表現の仕方になったし、『も』ということばの重みもずい分気になる表現であった。相手の顔を見ながらであれば、ことばのニュアンスも多少変わったろうけれど、何とも無責任な言い方をしたものと後になっても悔やまれてならない。

それにしても愛媛県は高校進学率九四・二%（昭和五一年三月中卒者調べ）、全国で一四番目に位置する高さ

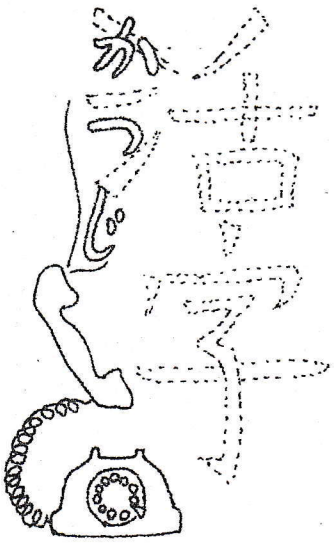
になり、松山市ではそれをとまめっているにもかかわらず、公立高校特に普通科高校の数が少ない。その上、学校格差、私学との経済差、そこから生ずる偏見等々が、中学生の心をどんなに暗くさせていることか。

勉強に競争心を煽り、友達どうしを軍制させる大人達。そこには真の友達や連帯は生まれないだろう。そんな中から勉強に疲れた形やぶりの生徒や非行に走ろうとする生徒が現われても少しも不思議はない。むしろ、羊のように従順に指示どうりにしか動けない生徒の方が、こわい感じがする。

自分で考え、自分の力で、あるいは友人と協力してものを造り上げる喜びを持たぬ子供達こそ大人は心配し、配慮しなければならないのではなかろうか。無責任、無感動、無気力等々、三無あるいは五無主義の若者達が増えていることは、何年も前から指摘されていることである。

受験地獄、入試戦争などという暗い思いから少しでも開放し、伸び〳〵と明るい青少年期を送るためには、まず、高校全入制が望ましい。が、当面、公立高校の増設と私学への大幅助成、高校間の格差是正は是非必要である。そして近い将来は高校授業料の無料化、大学の門戸開放も叫びたい。

机上の難解な問題をとくだけが勉強ではないこと、労働を通し、遊びを通し、仲間達と協力してこそ、より深く、より広い学習ができることを、青少年達、いや、私達、大人自身が理解しなければと思う。そして必要に応じて大学の門をいつでもくぐることができるようにしてほしいと思うのである。



出版後のあれこれ

阪本敏子

ちょうど昨年の今頃だった。七、八十枚にも及んだ原稿を（五〇〇字詰）二四枚におさめることで悪戦苦闘していたつけ。それは、身をけずられるようなつらさであった。

女性史サークルで、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』という本を出版する計画をたてたのが一昨年のこと。私もつたないながら〝「てががみ松山交歓会」のあゆみ〟というテーマで原稿にとりかかった。

愛媛新聞婦人面の「てががみ欄」（読者の投稿欄）に掲載された人々の親睦会が「てががみ松山交歓会」といい、私も十年来の一会員ということから、このテーマを選んだわけである。

この原稿を書くにあたり、これまでの習性でとかく主観的になりがちなのを、篠崎先生からあくまでも客観的に書くようにと指摘され、そのむずかしさに頭をなやませた。

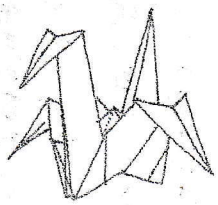
これに手をつけたまではよかったが、思いがけぬ中傷の言葉が間接的に耳に入って来た時などは、わずらわしくなり、もう止そうかとくじけそうになったこともあった。

また資料の一つである文集〝やまびこ〟（てががみ会員による文集、年に一回発行）第一号から第十七号まで通して読んでみたとき、昭和三十八、九年頃の学テ問題にふれた痛烈な批判の文章が二、三目をひき、意を強くしたり、逆に昭和四十八年末の石油ショックをとりあげたものが全くみられずとても残念であった。チリ紙や洗剤が一時、市場からフッと姿を消し、日本中の主婦があわてふためいたっていうのに……。喉元すぎれば何とやらで四十九年の文集を発行する頃にはあのパニック状態を忘れている人が大勢を占めていたということだろうか？　かくいう私自身、原稿すら出していなかったのだから余り大きなことはいえた柄ではないのだが。その年

の政治・社会問題を象徴するような事柄を取りあげたものが一編でもあったら、この文集もどんなにか重量感が増したことだろうに、改めて印刷物の重みを思い知った。ほんのささやかな私達の文集でも、いつ、どこで、誰の目にふれられるやもしれない。毎年、安易な気持ちで原稿を書いていた私はおおいに考えさせられ、反省させられた。

去年のあの頃は私は仕事を持っていたので、昼間は仕事もせねばならず、その上、主婦としての基本的な家事（掃除・炊事・洗濯）もせねばならない。やっと夜更けてペンを持っても疲れで直ぐウトウト眠りこける。一家の主婦というものは腹が立つ程、雑用が多くて、せっかく軌道に乗ったと思うと、何だかだと中断させられ、イライラする。〝あゝ自分の部屋が欲しい〟とつくづく思った。広げた資料や原稿用紙をいちいち片づけるのはわずらわしいし時間のロスにもなる。

これほどまでに苦労して書き上げた原稿なのに、刷り上がったものを読んだ時、穴があったら入りたい位に欠点ばかりが目につき、何とも後味の悪い思いをしている。



高橋　三枝子著『北海道の女たち』
頒価　一、八〇〇円
送料　二〇〇円
連絡先　旭川市東光15〜3　高橋氏まで
なお、同氏著『蜂須賀の女たち』は近々増補してドメス出版より刊行予定

女心のつぶやき

今井由紀子

私は戦中をほんのちょっぴり引っぱった戦後派であるが、ほんとうの意味での戦後派、現代の若人といわれる人たちの行動や思考についてゆけなくて、目をみはる思いがする。

こういうと、きまって、「あなた、それは老化現象のあらわれでしょ」といわれるのであるが……。

老年期にはいったら、付き合いを減らして、気の合う人としか合わないようにするのが老年期の衛生法だと、何かでよんだことがあるけれど、しかし、若いうちはいくらわずらわしくてもこんな言葉が通用する訳もなく、又、世渡りも出来なくなってしまうだろう。

どのような場合も、いかなる人との出合いを大切にしたいと思っている。それは偶然と呼ぶにはあまりにも神秘的であるように思われるから。

消極的な私ではあるけれど、夢もロマンももっている。ただそれをどのようにして実行すればよいのか、どのように女ごころをあらわせばよいのかわからないでいる。そのうえ私は、人見知りがはげしく（こんな歳になっているのにおかしな話だが）人とのつき合い方にまず、劣等感を持っているので、そのことがすぐ頭にきて、うまく口がきけないことである。話さなければ、自分の意志もわかってもらえないことはもちろん、相手の言おうとしていることも、理解しにくいことはわかっている。しかし、知的な柔軟性にかけている私は、細く白い、ひきしまったからだをもたないのと同じように、のびやかさも、厳しさもない。

私自身は、「あなたに敵意はもっていません。私と親しくして下さい。」という意味をこめて、せいいっぱいの笑顔をしてはいても、スマートに会話できないことの悩みはつよい。

何か新しいことがおこると、キューンと胸がいたくなり、身も心もコントロールできなくなってしまう。

どんな場合でも、オロオロしないで消化するタフな知性が私にあったら、教育問題にしても、子どものしつけにおいても、自信をもって、「決断と実行」できるのに、とよくこのごろ思うことである。

能力中心、競争の激しい現代社会は、男性にとっても女性にとっても生きにくい社会である。しかし、人間らしく生きているかどうか、自覚症状もなくて、あるとき、ふとしらけた気持ちがすることがある。女ごころの空隙に悔いと痛みがやるせない。

自分の胸に手をあてて考えてみても、なかなか本音はわからないけれど、女と妻と母をのりこえたところで、昇華したいものと、われとわが身をふりかえってみた。

サークル学習情報

月曜会

テキスト学習「近代日本女性史」米田佐代子著

聞き書き　愛媛の歴史に生きる女性達の聞き書き

明治以後の愛媛の歴史年表作り

火曜会

テキスト学習「女性の歴史」高群逸枝著

他、楽しく自由なおしゃべりなど……

愛知女性史研究会

『戦後愛知女性史年表

―明日を生きるために』

頒価　八〇〇円

送料　二〇〇円

連絡先　名古屋市昭和区鶴舞2-19-13　伊藤弘子

「えひめを変える」主体として

―第二八回全国大会第一分科会での報告―

二宮敏子

昨年夏、名古屋で開かれた歴教協全国大会に、女性史サークルの出版活動について報告のため出席いたしました。この報告書作成にあたっては、本の出版と同じように、新旧会員、頭を寄せて、みんなで考えたものですが紙面の都合で多少省略してあります。ご諒承下さい。

四国松山市で二十年間、女性史の学習を続けてまいりました。女性史サークルが、このたび一冊の本をまとめました。『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』という題です。この本が出来上るまでの女性史サークルの歩みと本の内容などについて報告させていただきます。

まず女性史サークルは、昭和三一年、勤評闘争がはじまった年に発足し、今年で満二〇周年を迎えました。松山市教組の青年部が呼びかけて、井上清の『日本女性史』をテキストとして学習をはじめました。その後、労働者主婦・学生などさまざまな立場の人達が〝歴史の真実を学びたい〟とか〝世の中の動きを知りたい〟とか、あるいは〝何でも話しあえる友達がほしい〟という願いをもって参加してまいりました。この二〇年間には男女あわせて約二百人の人達が会員となっております。学習は、毎週一回月曜の夜行なってきましたが、家庭の主婦達も多くなってきたために、お昼の学習会も設け、現在は、月曜会・火曜会、この二つのグループで学習を続けております。愛媛歴教協の委員長でもあります愛媛大学の篠崎勝先生も発足当初からの会員として、又チューターとしてずっとサークルに参加して下さっております。女性史サークルには会則も規約もありませんが、参加者の少ない時でも三人集れば流会にしないこと、どんな小さな

ことでも全員で相談してきめることなどを不文律のようにして続けてまいりました。現在は直接学習に参加していない会員も、それぞれの生きている場で、地域をかえる運動に先頭に立って頑張っている人達もたくさんいます。サークルの機関誌『むぎ』も、一九号まで出しております。

二〇年間の長い学習の間には、職場の悩みや家庭の問題、教育の問題、テレビのCMが話題になったりして、いわゆる雑談もよくいたしました。その中でも私達の生活そのものが歴史の動きと大きくかかわりあっているのだということをお互いに実感として学びあっております。

又三年前、第25回歴教協全国大会が松山で開かれました時には多くの会員達が積極的に参加し、愛媛報告や、地域に学ぶ夜の集いでのお世話役などもさせていただきました。

愛媛の婦人の歩みをまとめたい――というのは、私どもサークル会員の永年の夢でもありました。愛媛に住んで仕事に通ってきた婦人達の歩みを掘りおこし、記録し、総括して多くの人々に語り伝えていくことは、ここに住み、働きながら学んできた私達サークルメンバーの役目でもあると考えたからです。そしてサークルが誕生して二〇周年と国際婦人年、婦人参政権を得て三〇周年と記念すべき年にまとめを出そうということになったわけです。仕事を持ち、家庭を持ち、ただでさえ忙がしい主婦や婦人労働者にとって、自分たちで歴史をまとめるということは、当初の意気込み以上に大変な仕事でした。まず戦後三〇年間の資料を掘りおこして集めなければなりません。ささいな新聞記事も見逃さないよう、図書館に通って調べたり、一枚の案内状、一つの通達もおろそかにしないよう、記憶のすみにあったこともみんなたぐりよせて、資料を作り、その資料にもとづいて、事実を忠実に伝えるよう心がけました。ふだんおろそかにしているビラや案内状が大変貴重な資料であったことを改めて自覚いたしました。このたびは京都でも婦人の歩みが出

版され、愛知でも、北海道でも同じように女の歴史が綴られていることを伺い、御苦労も大変だった事と存じ、又私自身も、全国の仲間との連帯感を得て、自信と深い励ましを受けたようで感動いたしました。

こうして、ぼう大な資料を整理し、下書きをつくりましたが、人によっては原稿用紙五百枚位に書いたものを、きめられた枚数におさめなければならず、会員達は集るたびに検討を重ねてまいりました。直接執筆しない会員達もみんなで意見を出しあい、清書を手伝ったり、編集に参加したりして、サークル全員の協力でもって出来上ったということも、大きな特徴だと思います。愛媛に生きる自分達が歩いてきた道そのままを自分達でまとめた、文字通り手作りの運動史としてマスコミでも取り上げられました。この本の内容につきまして少しふれてみますと、テーマは私共が日頃かかわってきた活動や関心を寄せてきたことから13の項目にまとめました。（省略）

私共女性史サークルは、一般的な女性の歴史を学習するだけにとどまらず、それぞれがかかわりあっている運動についての疑問や問題点を出しあい、討論し、学習し、さらに実践をしていく中で確かめあい、地にはい、働き、生活を営む人々こそが歴史を作るのだということを身につけることができました。

このことが私達の歴史に対する観念をかえると共に、運動をすすめる視野をひろげ、単に松山・愛媛だけでなく、ベトナム支援など、世界へ目を向けるようになりました。このことこそ、私達が二〇年にわたって学習を続けると共に、それぞれかかわっている運動に参加し続ける力になっていると思います。

私達えひめの婦人が、民主々義に近ずくために少しでも努力してきた姿を、私達自身の手で記録する作業にとりくむことができるようになったことは、働く婦人が研究者としても成長していく過程であると思います。

私達は地域住民みずからが、住民の歴史を記録し、語り伝える営みを通して、地域社会をかえる主体に成長す

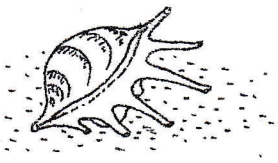
ることを知りました。

こちらに参りまして、全国の皆様の報告を伺いますと、私共の活動はまだ〈不充分なことばかりではございますが、これを契機として、これからも、もっと〈多くの人達と手をつないで、地域の実際の婦人の運動にとけこみ、学び、愛媛という地域を愛えていく姿をさらに明らかにしていきたいと願っています。

この本が出来上りまして、レセプションをいたしました。その席で、私共のチューターから頂いた俳句があります。

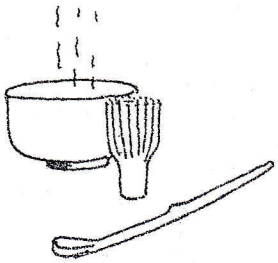
「さざなみの愛媛を語れ波の子よ」

私達は、今後も正しくえひめを語り伝える波の子でありたいと心から思っております。以上で私の報告を終ります。



七八年度新年会

一月二八日(土)午後一時より、近代史文庫事務室において、なごやかに開かれました。日頃、顔を合せることの少ない月曜会と火曜会の会員十五人ばかりが顔を合せ、例年どおり、篠崎先生のお点前により、みんなでお茶をいただきました。その後、今年の抱負など、たのしく語りあいました。



「北見女性史研究会」の誕生とその後の活動

北の果て北海道北見女性史研究会代表の廣谷千工子さんから、「北見女性史研究会の誕生とその後の活動」について、是非松山の方々に知っていただきたいと、北見市歴教協の小池先生を通じて手渡されました。

これは四年前、松山で開かれた歴教協全国大会で、私達女性史サークルのことを知られたのがきっかけで、北海道でも是非援方式に学べという合言葉が持ち帰られたそうです。北見で誕生した女性史サークルも、実にめざましい活躍をしておられますが、紙面の都合もあり、一部をご紹介しました。

（三宮　記）

一九七四年二月一六日、私達の会――北見女性史研究会は広く市民に呼びかけつゝ、スタートした。会員は工大生・公務員・主婦・教師という具合で、歴史の専門家は一人もいなかった。具体的な聞きとりをどのように進めるか、なぜ女性史を掘り起すか全くわからず、まさに暗中模索だった。しかし疑問や問題はみんなで出しあい話しあって意志統一、北見の廃娼運動の調査のため文献資料を調べ歩き、日本の廃娼運動も学習した。足で歩き確かめる中で新しい事実を発見すると共に、なぜ女性史を掘りおこすのかという問題提起を会員一人一人が認識しみんなのものにすることができた。だから私達は会結成のとき次のようなことを確認した。

「北見の地域に生きた女性たちの証言・記録を通して女性の歴史を探って行こうとするもの――大きな仕事である聞きとりにおいて私達が心がけなくてはならないことは、決して現代に生きる私達の主観や感想に色づけされたとらえ方をしてはいけない、ありのまゝの事実をゆがめることなく記録することである。私たちは『歴史を学ぶ』というきわめて初歩の部分から出発したものであ

る。だからそれ程気負っている訳ではない。歴史を学ぶということは、現代に人間としてどう生きるかという極めて積極的な問であるように思う。その気持を大切に、自分達の身近かな歴史を正しく見る目を育てていかなければならないと思う。」

こうして私達は運動の見通しを何とかつかんで行った。又、米田佐代子著『近代日本女性史』をテキストにして学習を続けながら、機関誌『北見の女』創刊号に集約していった。一昨年七月才二号を、昨年七月才三号を発行している。

新らしい女の歴史をつくるために

――じっくりと問題を出しあい

大きくたくましくなりたい――

現在、会員一七名、結成準備期間より活動しているものは二名、他はこの三年の歩みの中で新しく会員として参加して来た人達である。就職や所主人の転勤、家庭の事情で活動できなくなった人もいるが、出発の時の精神は聞きとりや機関誌の発刊、講座とりくみ、歴教協への参加、地域民衆史掘りおこし運動への参加、新年会・忘年会、送別会等の中で、その後の新らしい会員にたくましく受けつがれて育てられている。女性史を掘りおこすという理念は、最初から参加していようが、最近参加した人であろうが、会が目ざすものは変らない。いつの時も突っ走ることだけがすべてではない、春の花がいっせいに咲くのは長い冬の蓄ぶきを待つ時がある。私達は一社会人として、仕事や家庭をもち夫や妻であり、父や母であり、学生であるのだから、さまざまな現実の問題を解決することと、この運動への参加が同時に進行できなくては、私達は何のために女の歴史を掘りおこすのかわからなくなる。停滞の時も疲れる時もあるだろう、だがもっとずぶとく余裕を持って、互いに良い意味で大きくたくましくなって行くのなら、私達の目ざす新らしい女の歴史もつくられて行くし、この運動の理念に到達することが出来ると思う。

北見女性史研究会は、今後とも集団的な聞きとりを原則として学習を平行してすゝめ、土と共に生き社会を支えた、戦前戦後の開拓の女性像をもっと深く掘り下げると共に、労働運動史の女性等、さらに新しいテーマを追求するつもりです。

御支援、御協力お願い致します。

女性史サークルに入って

田中綾子

私が女性史サークルに入ったのは、保母試験の会場で知り合った山口女史に紹介されてのことでした。そして、早くも六ヶ月が過ぎようとしています。松山に来てまだ日の浅かった私は、松山のことは勿論、女性史サークルのような活動がある事など全ったく知りませんでした。

さて、入会して学習会に参加してみれば、何と二三年の了史があり、構成している方々も松山の各方面で活躍している職業婦人や議員さんなど、しかも会員了二十年というゆう大ベテランばかり、愛大の了史の先生や数学の先生もいらっしゃるとあって、何か、私などがくるのは場違いではないか、又何をしている会なのだろうかと不安と疑惑にかられました。でも学習会の回を重ねていくうちに、いつのまにか不安と疑惑が消えて、何となく会の中にとけこんでいる自分を感じている今日この頃です。つかみ所がないと思っていた学習会も気がついてみると愛媛の了史年表づくりという私にとっては大きすぎる内容のものまで、先輩会員の方々のおかげで首をつっこむことが出来ました。いやいや引越して来た愛媛の地にとけこめず、いうなれば少しすねていた私が愛媛の了史を勉強する中で、少しずつ愛媛に愛着を感じはじめるようになりました。何事につけても無関心で無知な私ですが、今後は愛媛の地で生きてゆく女性の一人として、又女性史サークルの会員として女性の生き方について勉強し研究していきたいと思います。

「愛媛女性史と私の三十年」

―第三回労山四国ブロック「女性の集いで」―

川又美子

（前略）私がお話できますことは、現在、私たちの身近かなところで、家庭をもち、社会的な活動にも参加しながら、女性として、また人間として、前向きに歩きつづけているたくさんの婦人たちの歩んできた道を、私の知る範囲で、事実にもとづいてお伝えするということくらいです。有名な人ではない、あたりまえの婦人たちの歩みを、これから長い人生を歩もうとしておられる皆さんが、ご自分にひきくらべて聞いてくだされば、何かつかみとっていただけるものがありはしないだろうか、という願いをこめて、お話してみたいと思います。

愛媛の、さまざまな婦人たちのことをお話する（もりですが、まず、はじめに、私のよく知っています二～三の方の歩みを紹介させていただきます。

給食費があがる！　反対運動を―小亀さん―

その一人は、小亀妙子さんという方です。松山市桑原町に住む主婦です。昭和四六年四月二八日のことです。小学校の給食費が、一食分八円値上がりすることが、テレビニュースで報道されました。小学生を持つ母親の多くが、そのニュースをみて、まあヒドイ、と憤慨しただろうと思います。（私もそう思いました）。小亀さんもその一人でしたが、そのあとの行動ということで、小亀さんは少しばかりちがっていたのでした。その時のことを、彼女は次のように語っています。

「三人の子どもを持つ平凡な主婦が、政治運動に関心を持ちはじめたのは、四六年一月の知事選からで、革新統一を推進する「明るくする会」に参加している主人の姿に接し、はじめは手伝いのつもりが、だんだん本気になってきました。その時、テレビで、学校給食費があがるのを知りました。」「給食というものは」「給食教育という義務教育の一環です。それを、材料費があがったからといって、その値上げ分を、当り前のように父兄負担にするのは納得できない、たとえ八円でも」

彼女はさっそく、四月三〇日から、婦人団体やPTAなど、各種の団体への働きかけや、署名集めなどを呼びかけました。そして、運動の中心となって、精力的に動きまわりました。愛媛新聞の記事（「女の地図」）によると、

「市当局にも陳情日参、五月二〇日すぎには、給食費値上げ反対の署名は一万人にふくれあがった。」「それまで父兄が一部を負担していた運営費とか、施設設備費などは、全部、市の負担になりました」「一主婦が給食費値上げ反対を叫んで、わずか三ヵ月余り、この運動は大きな世論となって、市の給食行政に一本の筋を通しに」

とあります。この運動が一段落したあとで、彼女は次のように考えました。

「しかし、主婦に返り、家庭に帰ったとき、運動の成果とうらはらに、砂をかむ思いで、二度と運動なんかしたくないと思いました。運動の急速な展開は」「全く家庭を放置させてしまいました」「当時二才の末娘が、今帰るか、今帰るかと、ざぶとんを玄関に持ち出して涙を流して寝ていたり、お風呂に入れてやれず尿道炎を起こしても、病院へ連れて行けず、子どもがどんな気をとっているのかも知らなかったし、運動費としての出費も大きかった。こんな運動でよかったのかという苦い反省」「私も何かの団体に入ろう。そして、家庭生活と政治運動とを心から語り合うことによって、みんなと力を合わせあう人になろう」

そして彼女は、「新日本婦人の会」に入会し、地域の主婦をさそって、〝桑の実班〟をつくりました。そこで、小学校の〝施設充実〟のための寄付反対運動や、日の丸掲揚の強制反対、自衛隊見学遠足への抗議など、教育や生活の問題を、仲間とともにとりあげて運動にひろげていきました。それは〝下駄ばき三分〟の距離内で、いわば「糸でんわ」のように身近かな運動だったのです。小亀さんは、

「近隣の人と生活を共にする中で、そこから住民の本当の要求を汲みとっていく心を持ちたい。そういう態度で生活者になるということも、活動といえるのではないだろうか。あまりにもマイペースかも知れないが、これならば一生つづけられる活動だと思うのです」

と述べています。

小亀さんは現在、洋裁学校の専科生として、洋裁を勉強中です。最近、一月二一日の愛媛新聞紙上（「主婦のおしゃべりタイム」）でも、次のように紹介されています。

「三年のコースを、六年かけて、今春卒業する」「夫と三人の子どもの協力で、〝家事・仕事・学生〟として、現在二四時間をフル回転中」「末っ子の友達が来ても、『あの子はお茶碗洗ってからでないと遊べないから待ってね』というと、変な顔します」そして、「昨年、一〇日ほどの予定で、デザインの勉強にパリへ行ったんです」「帰ってみると、家中、掃除がゆきとどいていて、食事の用意もできている。それみて、私がいなくてもいいんだナと、ちょっぴりさびしかった」「家族旅行のために、今度は料理学校に入学して、やっぱり、『家事・仕事・学業』の三本立てで、二四時間をやりくりするんでしょうね」

子供によい文化を―磯崎さん―

二人めは、磯崎明美さんです。松山市安城寺町に住む主婦で、現在「松山子ども劇場」の副委員長をしながら、化粧品販売の仕事もしていますが、子ども劇場をつくり

あげた中心人物の一人です。彼女は、次のように語っています。

「二六才の時、岡山の山陽放送の組合分裂攻撃の中で目ざめさせられました。」「その時、主人の磯崎も民放労連の中央執行委員として、一ヵ月間泊りこみで指導にあたってくれました。オルグに来てくれる人達は、みなすばらしい人ばかりで、そんなすばらしい仲間と、あらゆる集会や学習会に出ていって、どんよくに吸収していき、自分がグングン変っていくのが目に見えるようで、苦しいけれど、生きがいのある毎日でした」そして彼女は、結婚のため松山に来て、ちょうどそのときもり上がっていた市議会議員のリコール運動や、革新政党の選挙運動に参加するようになりました。

彼女と子ども劇場とのかかわりについて、愛媛新聞へ「女の地図」で、次のように紹介されています。

「なんとしても、子どもには良い環境の中で育ってほいと思った。子どもをとりまく交通戦争・俗悪なテレビやマンガ、グロテスクな怪じゅうマンガ、そんなものの中から、子どもをひき出して、創造性のある夢を育ててやりたかった。自分に子どもができてからは、この願いはいっそう切実なものとなった」「『松山に子ども劇場をつくろう』と、一〇人ほどが準備会を開いたり、会員をつのったりして、四五年四月二九日の発足総会にまでこぎつけた」、「初公演には二二万円の赤字が出た」、「しかしそれくらいのことではへこたれなかった」、「初公演の経験を生かし、会員をひろげ、年間五回例会を開くほか、春秋二回の子どもまつり、ピクニックやキャンプも催すなど、松山子ども劇場の内容を充実していった。ときには、自分の子どもを保育所に預けて、子ども劇場のことで走りまわる磯崎に対し、『あの人は好きでやってるんだ』『金にもならんのにやっている、何かに利用しようとしているのでは―』と、せんさく好きな周囲の目もあったが、磯崎自身は、『子どもたちに少しでもよい社会を残したい、心に栄養を与えてやりたいとい

う純粋な気持ち以外に何物もありません」

磯崎さんは、さらにこう言っています。

「お母さんたちは、子供の問題で行動する中で、少しづつ矛盾を感じ、目ざめつつあります。そして、PTAや地域の運動を、自主的、民主的に変えていく活動をする人も多く出て来ています。また、子ども達も、子ども会や学校で積極的に仲間の世話役を勤めているという成果が出ています」

保育運動への情熱 ―山本さん―

つづいて、三人めは山本翠さんです。松山市畑寺に住み、松山市役所の労働組合の書記として働いている、二人の男の子のお母さんです。

昭和三五年、いわゆる"六〇年安保闘争"で、日本中が騒しいたたかいの渦の中にあったとき、彼女は、県庁に勤める娘さんでした。その年の三月八日、愛媛国際婦人デーの集会の看板を見て、好奇心にかられて、妹さんといっしょに出かけました。そこで、安保条約が決議されようとしたとき、彼女はあわてて手をあげて、「私はよくわからないから、反対の決議には賛成出来ない」と少死になってしゃべりました。勇気のある娘さんだったのだと思いますが、そのあと、彼女は、「私はよくわからない」というままで、すませてはおきませんでした。彼女はこう言っています。

「それからは、学習会ときくと、とんでいきました。組合から、安保反対の国会請願に行ってはといわれ、大よろこびでスーツを新調し、ハイヒールを買いこんで出かけました。東京での、うねりのようなデモの中で、ハイヒールは運動靴にかわりました」

こうして、彼女は組合活動に参加するようになり、当時発足した民青同盟に加入し、地区委員、書記長をひきうけて、昭和三七年、民青代表として中国を訪問しましたが、そのとき、勤務先である県の許可が得られず、退職して訪中したのち、民青の専従書記長となりました。

彼女はこの頃のことを、

「政暴法闘争にかけまわり、日韓会談に怒りを燃やし、一〇〇名の青年と共に船を借り切って岩国基地撤去の闘いに岩国まで出かけ、山に、海に、恋愛問題にかけまわったこの頃の、思いきり青春をぶっつけた経験をもつ私は、この経験がいま、宝のように思えるのです」

と語っています。

その後、仲間の一人と結婚し、出産と同時に過労のため家事に専念しましたが、五か月後に、自治労松山市支部の書記になりました。

「生まれた子どもは、夫と交替で一日おきに両方の親のもとに預けて通いました。子どもをおんぶして、ネンネコを着て、自転車で風を切る夫の姿を見て、知人たちは、夫がえらいとも、かわいそうだとも云い」

「私達は、至極あたり前だと思っておりました。松山市議会のリコール運動には、連日、子どもをおんぶして職員の家をあるきました」

と言っています。やがて、次男が生まれ、彼女は、二人の子どもを保育所へあずけて仕事をつづけました。

「満員バスに子どもを背負い、三才の子の手をひき、ユタンポと匂いのするおしめをかかえての、道中の苦闘はありましたが、保育所のあることはありがたいものだと思いました。そんな時、保育所運動のおばちゃんが、私にまわってきました」

こうして、山本さんは、昭和四四年、「保育所をつくる実行委員会」の事務局長をひきうけます。そして昭和四五年夏、全国保育問題研究集会が長野で開かれることを知り、友人、知人にカンパを頼み、子ども二人をお母さんに預けて、たった一人で参加しました。

「私はそこで、全国の、よりよい保育をめざす仲間の熱気に、目のくらむ思いをし、むさぼるように話を聞きました。血のにじむような聞いを、母親は母親で、保母は保母で、展開している報告は、際限がありませ

んでした」

と彼女は語っています。そして、松山に帰ってくるとすぐ、仲間といっしょに話し合って、保育所実行委員会の活動や、父母の会活動などに積極的にとりくみ、さらに、自分の職場である自治労の中でも、保母の組織を強めることに力を入れました。

「二人の子どもをつれての、この活動は、勤務の合い間をぬい、洗濯物をためてのことで、今思うとしんどかっただろうなあと思いますが、不思議とそのしんどい記憶がありません」

と山本さんは言っています。

「女性史サークル」―私の歩み―

「次に、今日の演題が、「愛媛女性史と私の三〇年」ということになっておりますので、私自身の歩みも少しつけ加えて話させていただきますと、私は高校を出て二年間、県庁に勤め、昭和二八年に愛媛県教組の書記になりました。そしてそこで、昭和三一年から始まった愛媛勤評闘争に出会いました。全国各地からの応援の中で、県庁前のテントで夜を明かしたり、ピケをはって警官隊にゴボー抜きされたり、激しいたたかいの中で、权力の姿をいやおうなく見せつけられました。

その頃はじめられた女性史サークルへも参加するようになり、生まれてはじめて、了史の勉強をするような気持ちで、テキストの『日本女性史』の学習にひきつけられていきました。サークルには、働く婦人や主婦、学生、教師などさまざまな人が参加していて、いろいろな不満やなやみなども語り合われていましたが、そんな雑談の一つ一つを通して、私たちのおかれている現実と了史の法則のかかわりあいがずっしりと胸におちる―そんな学習がつづけられました。

そして昭和三四年に結婚し、共働きの婦人労働者の仲間入りをしました。結婚しても仕事は当然つづけるものだと思っていましたから、家庭か仕事かという悩みはあ

りませんでした。もちろん、婦人が社会に出て働くことの意義も感じておりましたが、何よりも、共働きしなければ生活できないという現実が目の前に横たわっていたからです。

やがて、〃六〇年安保闘争〃の全国民的なたたかいの大きいうねりの中で、毎日デモに参加し、刻一刻とうごく政治情勢をみて、音をたてて歴史が変っていくことを、体で感じとっていきました。それを変えていくのが、誰でもない、私たち自身であること、そして歴史の流れを押しとどめようとする力が何であるかということを、この時はっきりと見たように思います。そしてそれを知った以上、私は、いつ、どんな場合にでも、社会を変革し、進歩させる立場にしか自分をおくことができないと心を決めました。それは、私にとって、一つの新しい出発点だったと思います。

安保闘争できたえられ、たくわえられていった婦人の力は、やがて保育運動に火をつけました。松山では昭和三六年に、「よりよい保育所をつくる実行委員会」が結成されました。昭和三八年には、私にも長女が生まれましたが、ゼロ才児を預かってくれる施設は一つもなく、たちまち預けるところに困って、数人のお母さん達とともに、無認可の共同保育をはじめました。「ニワトリ小屋よりもひどい」といわれたような場所で、財政も火の車でしたし、〃生まれたばかりの赤ん坊を、何もそんなにまでしてムリに働かなくても〃という世間の風潮や、〃婦人よ家庭に帰れ〃という国や自治体の行政の姿勢も大きいカベとして立ちはだかっていました。それでも、私たちは、乳児の集団保育のよさを見つけ出そうという意気ごみで、二年間夢中で努力しました。この時期から運動はますますひろがり、四年後に私の長男が生まれたときには、乳児保育所も二か所新設され、運動の成果はさまざまな形で福祉行政に反映されました。

この時期には、何をするにも、子どもをワッペンのように背中にくっつけて歩きました。松山市の活動議会の

リコール運動でも、山本翠さんなどといっしょに、私も毎晩子どもを自転車に乗せて署名にまわりましたが、その後も、しばらくはよその家に行くたびに、子どもが反射的に、「アー、リコールのショメイヲ」とやり出すので、あわてさせられました。みんなが、いろんな苦労をしてがんばったのでした。

昭和四六年一月の知事選挙のときも、「清潔で明るい愛媛をつくる会」が生まれて、夜もなく、昼もないような忙がしい毎日がつづきましたが、誰もしんどいとはいいませんでした。私も、長男はあちこちに預け、一年生の長女には、毎日深夜まで一人で留守番をさせましたが、ふしぎと不平はひとことも言いませんでした。そして、「青いドーナツへ明るくする会」のシンボルマークのことは正義の味方よね、お母さん」と、私は何度も念を押されたものです。この選挙は、あと一歩というところで敗れましたけれど、革新統一でたたかったこの経験は、今も、私たちの胸に底深く、明日への確信を根づかせています。

そして今、私達のまわりには、なおいっそう数多くのさまざまな婦人の、さまざまなたたかいや活動がつづけられています。私も、女性史サークルや近代史文庫の会員として学習や記録活動などをする中で、今、ここで生き、たたかっている私たち自身の手で、そのような婦人の歩みを記録し、あとづけて行きたいと思っております。

が、昨年、女性史サークル二〇周年と国際婦人年を記念して、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』をサークルで出版することができました。これからも、そのための学習や活動を、ずっとつづけていきたいと思います。

愛媛の婦人は戦後三〇年をどのように歩んだか

今までお話してきました人たちは、決してこの方たちだけが、特にすばらしい人だと思って紹介させていただいたわけではありません。重ねて申しますが、大勢の、あたりまえの愛媛の婦人の一人なのです。

それでは、大勢の婦人たちの、どんな歩みが、愛媛にあるのでしょうか。そしてそれは、小亀さんや磯崎さん、山本さんたちの歩んだ道とどうかかわっているのでしょうか。私には、愛媛の、戦後の、それもごく一部分のとしかわからないのですが、「愛媛の婦人戦後三〇年の歩み」には、次のようなものがとりあげられています。

敗戦直後の生活と婦人の政治意識、消費者運動、市議会婦人議員の発言集録、PTAの歩み、愛媛の母親運動のあゆみ、保育運動の歩み、自治体で働く婦人の運動、統計から見た愛媛の婦人、松山子ども劇場の歩み、てかがみ松山交歓会の丁史、女性史サークルの歩み、です。

この本の中から、その一部分にふれてみたいと思います。

―敗戦直後の婦人―

敗戦直後の愛媛の婦人、つまり、皆さんのおかあさんの世代の生活はどおだったでしょうか。昭和二〇年八月一五日の敗戦によって、長い戦争の時代をくぐり抜けて生きてきた婦人たちは、空襲の恐怖もなくなり、モンペをスカートにはきかえて解放感も味わいました。けれども一方、食べること、住むこと、着ること、生活のすべての面で、かってない試練を受けました。

そのような生活難の中で、昭和二一年四月一〇日には、最初の婦人参政権を行使する総選挙が行なわれましたが、これをめぐる婦人の意見は賛否両論でした。例えば、船田操さんは、「家庭的に完全な女性であり、政治的にも十分な見識をもつようにならなければ、人の子の親として、また一家の主婦として、女性として、完全であるとは言えない」と言っておられますが、当時松山高女四年生の塩見美知さんは、「日本婦人は古来、温厚従順をもってその美徳とするところであるのに、生半可な政治意識を鼻にかけ、口角泡をとばす勢で政を談じ、家庭に於ては夫を従え、家事を勧めず、良き母ではなくなってく

るのは非常に口惜しいことである」と述べておられます。初の参政権行使にあたって、愛媛の婦人の投票率は、男子七九%にたいし、女子六五%という結果でした。

昭和二〇年から二二～二三年にかけてのこの時期は、生活難にあえぐ中からも、婦人参政権の得や、民法上の婦人の地位の向上など、民主化への急激な動きがあり、婦人団体や労働組合などがつぎつぎと結成され、婦人の議員や教育委員、校長も生まれ、新聞への投書などで、一般の婦人も外へ向かってよく発言するなど、婦人にとっては画期的な前進の時期でした。

昭和三〇年代に入ると、教育、生活、権利、平和など、さまざまな分野について考え、行動する婦人がふえてきました

―労働婦人―

ことに、職場で働く婦人の数は、この時期から急速にふえつづけます。愛媛でも、昭和二五年から四五年の二〇年間で二倍以上になりますが、その婦人たちの多くが労働組合に結集して、婦人が働く上での諸権利を守り、拡げることに努力してきました。とくに、保母、看護婦、保健婦、事務員など、さまざまな職種で「ゆりかごから墓場まで」地域住民と深く結びついている、自治体で働く婦人の運動は、その中でも大きい役割り を果たしています。（昭和二七年に、愛媛県ではじめて、婦人の権利として認められた産前産後休暇の権利を行使したのは、県庁職員の佐々木ヤエ子さんという人です。この方は今も元気に登山を続けておられるということです。また、昭和四一年には、自治労県本部副部長の池田せつさんが、松山市会議員に当選しました。）

自治体財政の危機とか、企業整備による合理化が行なわれるとき、まず首切りの対象になるのは婦人ですが、それに対して、婦人の働く権利を守り、賃金やその他の労働条件で、職場での男女差別をなくするための活動がねばり強くつづけられており、そのための学習活動も活

発に行なわれています。そしてそれは、労働者の利益と、地域住民の利益は切り離せないという立場で、共同のたたかいとしてすすめられています。

働く婦人が増加すると共に、その中の既婚婦人の割合も増えてきます。生産性向上、高度経済成長政策のなかで、共働きしなければ暮せない労働者の家庭が増え、多数の婦人を職場に進出させましたが、そのことはまた同時に、婦人の働く権利への自覚も成長させていきました。子どもを生み、育てながら働きつづける婦人の間から、安心して預けられる保育所がほしいという、火を心くように切実な叫びがあがって来たのも、この時期からでした。

愛媛でも、昭和三六年に、松山よりよい保育所をつくる実行委員会が組織されました。乳児施設を含む保育所の新設を自治体に要求していくことを柱に、施設や保育内容の改善、保育者の労働条件の改善などの要求をかかげて運動をすすめました。無認可の共同保育所や職場把児所などの実践も経験しながら、昭和四二年には乳児保育所二ヶ所を新設させるなど、いろいろな成果をあげてきました。昭和四〇年代後半からは、その運動の成果を発展的に受けつぎ、「保育問題研究会」などが組織されて、施設づくりだけでなく、保育内容をも高めるために、発達観に基づく保育理論と、愛媛の保育現場に根づかせる活動がつづけられています。

―生活・教育の向上と平和への願い―

一方、家庭婦人の場合も、家庭の生活を守っていくためには、家庭の外、ひいては政治にも目を向けずにはいられませんでした。

三〇年代後半からは、高度成長の中で、いわゆる「消費者運動」も活発になってきました。「消費は美徳」「消費者は王様」などと言われた時期ですが、四〇年代に入ると、物価高や公害の問題がクローズアップされてきました。チクロやサルチル酸、PCB、AF2などの有害

食品の追放運動もたかまりました。とくに、昭和四八年の〝オイルショック〟による物価の高騰と物不足から生活を守るために、その原因を考えて積極的に解決しようと、自覚をもって行動に立ちあがる婦人が増えました。物価調査や食品検査、商社への抗議、自治体への要求、自主手段としての青空市、生協運動などが、意欲的にとりくまれました。

「母親大会」というのをお聞きになったことがあるでしょうか。昭和三〇年七月、スイスで開かれた世界母親大会開催への許え「母の名において死から生命を守り、憎しみから友情を守り、戦争から平和を守るために団結して行動しよう」を受けて、その年六月、東京で第一回日本母親大会が開かれました。全国各地から二千人が参加し、愛媛からも代表が参加しましたが、その人たちが中心になって、昭和三三年七月には、第一回えひめ母親大会が開かれました。約八〇〇人が参加し、熱気あふれる集会となりました。それ以来、毎年夏、母親大会は開かれて、えひめ母親大会は今年第二〇回をむかえます。

この大会は、子どもと教育の問題、くらしと権利の問題、平和と母親運動の問題など、婦人にかかわりのあるあらゆることがらを、思想、信条や職業、老若にかかわらず、すべての婦人が自由に話し合える場となっています。同時に、その時々の問題について、決議や申し合せに基づいて、自治体などへの要求行動も行なっています。

そのほか、子ども劇場とか、愛媛新聞の婦人読者のグループで、読書活動や文集発行をしている「てかがみ会」、古くから学習、読書活動や教育運動にとりくみ、最近は宇和島空襲の記録を出版した草の芽会、二〇年間女性史、ア史の学習をつづけてきた女性史サークルなど、たくさんの文化活動やサークル活動もあります。もちろん、労山、労音、市民劇場、合唱団など、そのほかにもたくさんあると思います。

こうして、住みよい家庭、地域社会をつくりたいという、素朴な願いから生まれた行動の一つ一つが積み重な

って、住みよい環境、日本にしていくための大きい力になっていることを痛感します。

人間として・女性として
歴史の担い手として

母親大会は、昭和三〇年の第一回から現在まで、「生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます」というスローガンをかかげています。これは、婦人が担っている歴史的使命とでもいったものを、ズバリといいあらわしたすばらしい言葉だと私は思うのですが、私たち婦人は、生命を生み出し、さらにそれを育て、守ることによって次の世代に送り出していくという大変な仕事を持ちながら、同時に、自分自身も一人の人間として、人間らしく生きたいという願いを、誰もが持っているのだと思います。

労山の「趣意書」を読ませていただきましたが、その中にこう書かれておりました。

「登山者にとって、登山は人間生活の糧であり、人間としての当然の文化的欲求であり、基本的人権の一部である」

「今日、登山を愛好する日本の勤労者は、労働条件や経済的な低さ、国家の文化、スポーツ政策の貧困の中で、登山を自由に楽しむことは、充分保障されていない」

「登山を自由に行なえない所には、登山の発展も、人権の真の保障もない」

「勤労者の登山活動の前に横たわる様々な障害を乗り越え、道を切り開いてゆく」

登山であれ、何であれ、社会（家庭をも含めて）とのかかわり合いを保ちながら、自分のやりたいことを一生続けていくことは、すばらしいことにちがいありません。しかも、婦人のばあいには、その上に、子どもを生み、育てるという個有の仕事も果たしながらですから、大変なことですし、まだそれを貫いていこうとしても、今、私たちが生きている世の中は、そうそうだまって、好き

なようにはさせてくれないものです。登山者にとって、一般的な「横たわる様々な障害」の上に、女性登山者にとっての、個有の障害があろうかと思います。

どこの労山でも、人数の上では女性が六～七割を占めているのに、活動はその逆になっているというお話をききましたが、今日の分科会のテーマでもある「家庭」「職場」「結婚」は、最も大きい障害なのかも知れません。ここで、私はつい先日知り合ったばかりの、若い独身女性のことを思い出します。その方は、この集会の実行委員長、伊賀上邦子さんです。まだ二～三度しかお目にかかっていないし、皆さんのほうがずっとよくご存じの方ですが、先日労山の事務所でお話をきき、伊賀上さんが、学校を出てすぐ民間の会社に勤めていた頃のこと、"何もしらず"労山にとびこんで、その中で、どんなにたくさんのものを吸収し、どんなに豊かな人間的成長をして来られたかということに、私はたいへん心をうたれました。そして、労山の活動に打ちこむ中で、彼女自身が成長するとともに、まわりをも変えるかたつけて来られたことを感じました。彼女にとって、家庭も、職場も、将来のことである結婚も、少しずつではありますが、"障害"ではなくなりつつあるのだと思いました。

それは、伊賀上さん一人のことでなく、その場には、数人の若い女性が忙がしそうに資料づくりの仕事をしておられましたが、その方たちにも、恐らく同じことが言えるのではないかと思いました。今日お集りの皆さんもそうだろうと思います。また、先程紹介しました三人の婦人にしても、夫や子ども、家庭、職場は、すでに"障害"ではなく、理解とはげましを持った味方であろうと思います。山本さんは、"不思議としんどい就職はありません"と言っていますが、それはやはり、涙も汗もたっぷりと流しながら、自分を変え、まわりを変えてきた道すじであったろうと思います。

今はもう、婦人が結婚し、子どもを育てながら働きつづけ、あるいは社会的、文化的な活動やスポーツをつづ

けることは、ごくあたりまえのことになろうとしています。もちろんそれは、多くの先輩達の血のにじむような努力、あるときには生命さえかけてたたかいとってきた足あとの上に築かれてきたものでありますし、これからもまた、決して楽で平坦な道ではないでしょう。

また「報告書」から引用しますが

「登山は、それぞれの年令や、意識、生活条件に応じて多面的に発展させてゆくことが求められており、ハイキングや尾根歩きと冬山や岩登りを対比して登山の優劣を論じたり、ヒマラヤと国内の山岳に於ける技術的困難さだけを比較して登山活動の優劣を論議することは無意味である」

とあります。新幹線に乗っていても、途中下車して各駅停車に乗りかえ、ゆっくりと景色を楽しむこともいいのではないでしょうか。子どもをおんぶしたり、手をひいたりして登れる程度の山に行く人もいるでしょうし、子どもを預けても、より高度な技術に挑戦しようという人もいることでしょう。また山行はできなくとも、労山の事務所でがりを切ったり、電話番をすることも、登山活動への参加だと思います。将来は、労山の子ども部会とか、ジュニア労山が組織されるかも知れないと期待しています。

私は、労山に婦人部があって、このような女性の集いが毎年開かれていることは知りませんでしたので、最初に申し上げたように、それは驚きであり、感動でもありました。愛媛で開かれるのは初めてだとのことですが、これは、愛媛の女性史にとっても、重要な一ページが開かれたことだと思います。皆さん自身が、そのページを開かれたのだと思います。皆さんが仙人として、それぞれ労山活動の中で成長されながら、同時に、労山という一つの団体が、生まれてから何年かの間に、このような集いを成功させるまでに成長したのだということ——団体の構成員である仙人仙人が成長することが、団体そのものも成長することであり、団体が成長することはき

た、個人個人が成長することでもありますが――このことを、今からもよく考え、よく見つめていきたいと、私は思うのです。

労山の皆さんは、登山にかかわる問題を、社会的なひろがりの中で解決していくことを目ざしておられると思いますが、人間は本来、社会に働きかけ、社会を変えていく力をもっているわけで、その力こそが歴史を進めてきました。女性として、また人間として、人間らしく生きるために、自分がいま、生き、住み、働き、学んでいるその場にしっかりと根を下ろして、自分を変え、まわりをも変えていこうとする婦人がふえています。それも、ごくあたりまえのこととして、あたりまえの顔で――。そのような婦人がふえればふえるほど、そして男性をも含めた連帯の輪がひろがればひろがるほど、私達はすばらしい未来を手にすることができるでしょうし、私たちにとって、人生は楽しいものとなるでしょう。そんな歩みを、私も皆さんと共に、これからも歩みつづけたいと願っております。

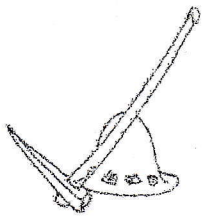
（一九七七・二・六　松山市・御幸会館）

―参考資料―

『愛媛近代史研究』二四号（一九七四・三）近代史之摩

和田重作著『女の地図』（一九七五・一）愛媛新聞社

女性史サークル編・著『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』（一九七六・五　女性史サークル）



女性史サークルのあゆみ
（一九七四年一一月～一九七七年一二月）

一九七四年秋、女性史サークル二〇周年記念行事として、「戦後愛媛の婦人の歩み」をまとめて刊行する計画をたてた。各会員がテーマをきめて、サークルの会合のたびに報告することにした。七四年一一月一〇日、野本ツタ子が「〝学テ〟について」、同月一八日、川又美子が「愛媛の保育所運動について」、同月二五日、磯崎明美が「松山子ども劇場について」、それぞれ報告した。

一九七五年に入って、月曜会、火曜会ともそれぞれ学習をすすめるなかで、次第に「愛媛の婦人戦後三〇年の歩み」についての構想がまとまってきた。そして同年六月二日には、執筆者とテーマもほぼ決定し、全体の企画ができあがった。

ついで六月九日、六月一六日には、渡辺留美子が「売春について」報告し、六月三〇日、三宮禎子が「愛媛の婦人の現状と課題について」報告。ついで七月七日には、次のような刊行案内のチラシ四、〇〇〇枚ができ上がった。

ことしは国際婦人年です。婦人年のテーマは、平等と発展と平和です。ことしはまた、日本の婦人参政三十周年です。わたしたち愛媛の婦人は、戦後三十年、どのように歩んできたのか、その歩みを考えてみるよい機会だと思います。わたしたち女性史サークル二十周年を記念して、「愛媛の婦人戦後三十年の歩み」を編集中で、本年十二月末に出版の予定です。資料その他について、何かと御協力をお願いします。（下略）

七月一四日には、野本ツタ子が「敗戦直後の婦人の動向」について報告。七月二〇日には、「婦人参政権獲得三〇周年・国際婦人年第一八回えひめ母親大会」が開かれ、会員が参加者に刊行案内のチラシを配布した。また同月二八日、栗原美奈子が「自治体で働く婦人の運動」につ

いて報告した。ついで九月八日には、工水戸富士子が「第一回～第二回えひめ母親大会」について、九月一五日、かわもと・けんじが「女性史サークルの歩み」について、九月二二日、三宮禎子が「愛媛の婦人の現状と課題について」、九月二九日、工水戸富士子が「第一五回えひめ母親大会」についてそれぞれ報告した。一〇月に入っては、一〇月六日、栗原美奈子が「自治労婦人集会の歩み」について、三宮禎子が「愛媛の婦人の現状と課題」について報告、一〇月一三日、野本ツタ子が「敗戦直後の婦人の動向」について報告した。一〇月二一日から、「木曜会」の会合を、毎週火曜日に変更した。つづいて一一月三日には野本ツタ子が「敗戦直後の婦人の動向」について、かわもと・けんじが「女性史サークルの歩み」について報告。一二月二二日には、執筆要項を相談してきめた。

明けて一九七六年一月七日には、月曜会・火曜会合同の新年会を、近代史文庫事務室で行ない、一二名が参加して楽しく語り合った。一月一九日には、川又美子の「愛媛の保育運動」と野本ツタ子の「敗戦直後の婦人の生活と意識」の草稿検討を行なった。

三月一日付の愛媛新聞は、「『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』出版へ　松山の女性史サークル　活動二〇年の集大成　事実の流れ忠実に語る」と題して、次のように報道した。

女性史の学習・研究を続けている松山市の女性史サークルが、りままでの成果をまとめた『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』を出版しようとしており、今最後の仕上げにとりかかっている。これは国際婦人年・婦人参政三十周年、女性史サークル二十周年を迎えた昨年からそれらを記念して始められたもの。婦人問題を婦人たち自身の手で系統的にとらえた本が出版されるのは、全国的にもあまり例がないと言われ、県内外から期待されている。（中略）活動は女性史を中心とした歴史書・思想書を読むほか、婦人・社会・国際問題を盛り込んだ構成劇の製作、ベトナム戦争の経過を克明に記録した『ベトナム年表(1)(2)』、『戦後えひめの女性史年表』の作成・発行など幅広い分野にわたって

た。こんどの出版はそれらの活動の一つの集大成というべきもの。（中略）

この本の特徴は、ぼう大な資料のなかから事実を取捨選択していくうちに自分の考え方が自然に現れてきて、事実の流れそのものが歴史を忠実に語る――という形式をとっていること。また執筆しない人も含めてサークルの会員全員が原稿に目を通して意見を述べ、全体の責任で、編集していることである。さらに執筆者たちはそれぞれ『』でかがみ女歌会』を通読して、初心にかえれ――と反省します。』（限本）、『私たちの運動は日本全国に広がった運動の一環』（工水子）、『いま経済的危機にある自治体における婦人の立場について自信がついた』（栗原）、『あたりまえの婦人があたりまえに生きていける道を探っていきたい』（池田）――と感想を述べ、顧問格の篠崎勝愛大助教授は『忙しいのにみなさんよくやったと思います。愛媛で今までなかったものだけに貴重な資料』と称賛を惜しまない。家庭を持ち、職業を持つ婦人たちが家族の協力に助けられながらえしい時間を割いて成し遂げるこの労作、本県のみならず全国の婦人たちにとって大きな励まーになるに違いない。（下略）

ついでNHKのローカル番組『テレビリポート』に出版の紹介がとりあげられることになり、三月九日、松山中央放送局で録画収録、翌三月一〇日午前七時二〇分から一五分間放映された。出演者は影山澄江、栗原美奈子、川又美子の三名。その概要は次の通りである。（アナウンサーは女性史サークル紹介として、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』の一節を朗読した。）

アナ　今日は、もう二十年余り歴史の学習を手がかりとして身近な問題と取組んできました女性史サークルの皆さんにおいでいただきました。この本の内容は、敗戦直後の生活と婦人の政治意識など十三章と年表からなっているそうですね。

川又　この本を作るために書いたのではなく、会員一人一人が生活の中で、かかわってきた問題をまとめた編集です。有名な一婦人の業績とかいうことでなく、他にも物価・平和・地域婦人・農村婦人・売春などの問題も予定されていました。

アナ　どんな観点から書かれていますか。

栗原　身近にある生の資料をもとに、草の根の事実にもとづいて私達、愛媛の婦人の歴史をとらえようとしました。

影山　書かなかった人も、原稿に目を通すなどして、全員で編集作業を進めました。

アナ　愛媛の女性史としてこの三十年をふり返ると…。

栗原　婦人参政権など新憲法によってかちとったものをどう理解して暮してゆくかという時代を終戦から五十年代いっぱい。六十年代は台所と政治が直結しているという意識が芽生えて来た時期、婦人の社会の進歩が目立ち、共働きが増えた時期。七十年代は、権利と要求への自覚が高まり、行動する婦人が増加した時期と考えて居ります。

アナ　この女性史の編集を通じて改めてお感じになったことは……。

田又　婦人の歩みというのは、新幹線ひかり号の特急ではなくて、各駅停車のほんとうにのろい歩みだと思います。いろんな壁にぶつかりながらどろくさいものだけれども、しっかりと地域に根を下ろした着実な歩みだと思います。あたりまえの婦人のあたりまえに生きていくためのあしあとを記録しつづけていきたいと思います。

ついで三月六日付の朝日新聞（愛媛版）は、「女の手で女の歴史を ＝ 愛媛の婦人戦後三〇年 ＝ 松山のサークルが来月刊行」と題し、次のように報道した。

戦後史を生き抜いてきた松山市の女性グループが、「愛媛の婦人・戦後三十年」の刊行を計画、原稿もほぼそろい、四月十日の婦人参政記念日に発行を目指し執筆、校正など最後の追い込みに入っている。（中略）読むことはあっても構成を考え、資料を発掘し、文章にまとめるという作業すべてが初めてのことばかり。日ごろ行きつけない県庁、図書館などに足を運んだが、文献より当時まかれたビラ一枚や当時者の証言に頼ることの方が多く、集めた資料の山を前にどこから手をつけるかぼう然としたこともしばしば。「労組や団体が材料集めに、夫や子どもが執筆に、グループの仲間が資料の抜き書きにとみんな協力してくれました」とメンバーは口をそろえる。（中略）婦人の手でまとめられたこれだけの女性史は全国でも珍しいという。「初めてのことばかりで不十分な点も多いが、これでひとつの足跡を記すことができた。刊行の日には盛大なパーティーを」と連日、夜遅くまで語り合うメンバーたちだ。

この間、会員は、サークルの会合はもとより、連日のように、編集・校正・印刷所との接渉など出版のための

作業に協同してたずさわった。そして五月一五日に『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』を刊行した。印刷が出来上がって本を手にしたときの会員の感激は大きかった。

五月一八日のNHKローカル番組「ニュース六、四〇」にもとりあげられ、放映された。

つづいて、「女性史サークル二〇周年・『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』出版記念祝賀会」を、五月二二日、午後二時から四時半、松山市二番町市美会館で開催した。会員はもとより、民主団体・婦人団体・学者・文化人等ひろく各方面から約〇〇名が参加して、盛大で華やかな祝賀会となった。祝賀会のプログラムは次のとうりである。

第一部　開会のことば　主催者のあいさつ　出版経過報告　祝句　お祝いのことば　祝電・メッセージ　お祝いの鼓・琴　乾杯　第二部　歓談　詩の朗読　舞踊・詩吟　独唱・合唱　お礼のことば　全員合唱　閉会のことば

第一部の司会は池田せつ、第二部の司会は栗本鳳美奈子と影山澄江がつとめた。まず、川又美子が主催者を代表して、次のように挨拶した。

みなさま、今日はお忙しいなかを、ようこそおいで下さいました。会員一同、心からお礼申し上げます。

女性史サークルは、昭和三一年に生まれまして、今年で満二〇才（はたち）をむかえましたが、ささやかな集団の、ささやかな歩みを、こんなに多数の皆様がたに、ともに祝っていただけることは、この上ない喜びでございます。

あの動評闘争のさなか、松山市教組の青年部がよびかけたのが、はじまりでございまして、その後、労働者・主婦・学生など、さまざまな立場の人びとが、歴史の真実を学びたい、世の中の動きを知りたい、友だちがほしいなど、さまざまな思いをいだいて、つぎつぎと参加するようになりました。そして二〇年の間には、およそ二〇〇人の人びとが、会員として、足あとを残してゆかれました。サークルのなかで結ばれたカップルも生まれました。（中略）学習の場所も（中略）転々としながら、テキストによる学習や女性史年表・ベトナム年表の発行なども、手がけてまいりました。（中略）何年お休みしておりましても、実家にかえるような気軽さとなつかしさで顔を出せるのが、このサ

ークルのねうちではないかと、自負しております。ここで、発足当時からのもっとも熱心な会員であり、私どものよきチューターでもあります藤崎勝先生の存在が、このサークルを支えるどんなに大きな力であったかということを、あらためて思わずにはいられません。この席をおかりして、藤崎先生と奥様に心から感謝申し上げます。

ところで、昨年は国際婦人年でした。婦人参政三〇周年でもありました。加えて、サークルもはたちになるということで、そのしるしに、私どもの手で、愛媛の婦人の戦後のあゆみを記述しておこうと思いたちました。仕事や家事に忙しいなかで、はたしてできるだろうかという不安もございましたが、日頃、かかわってきた活動や、関心をよせていることがらについての、資料集めや記述であれば、何とかできるのでは、という気持ちでとりかかりました。それからおよそ一〇ケ月、まったくのしろうとの仕事でございまして、思うようにははかどらず、いつできるのか、まだできないのか、と、みなさまにご心配をおかけいたしましたけれど、おかげさまで、やっと今日、不充分なものではございますが、お目にかけることができました。皆さま方のあたたかいおはげましや、ご援助にたいし、あつくお礼申し上げます。（中略）私どもは、これからも、より多くの方々とともに、学習をかさね、日常活動をつづけますなかで、愛媛の婦人の成長の足あとをたどりつづけてまいりたいと思っております。

つづいて工藤戸美子が、次のように出版の経過報告を行なった。

（上略）愛媛の婦人の歩みをまとめたい気持ちは、サークルが歩みをすすめるなかで、虹のように空にかかっていました。女性史サークルは㊀学習サークルでありながら　㊁サークルとして婦人の幸わせをつくり出す役にたちたい　㊂松山・愛媛という地域に根ざして――の三つの性格をもっているからです。藤崎先生は、折にふれて「あなたがたがやっていることこそ現代史の創造であり、一枚のビラ、一つの案内状が後世にとって貴重な資料だ」と教えていただきました。（中略）サークル二〇周年を機会に、婦人の歩みのとりまとめの形をといはじめたのは、サークル二〇年の積み重ねのなかで、おのずから機運が熟してきたということだと思います。（中略）私たちは「国際婦人年「婦人参政権三〇周年」にも、はげまされました。（中略）

しかし、何から手をつけ、どうしてよいかわかりません。（中略）会員自身がふだんから関心をもっていること、何かの形で実際にかかわってきたことなら、すこしは知っているし、資料も手許にありますので、その両方を各自があげて整理し、テーマをきめました。（中略）

編集委員には、サークル代表者の川又さん、サークルが場所をかりている近代史文庫勤務の野本さん、火曜会のまとめ役としての亀田さん、それに私工水戸があたりました。（中略）「原資料」を蒐集しました。（中略）ささいな新聞記事・一枚の案内状・一つの通達もおろそかにせずあつめ、原稿用紙に書きうつしました。（中略）

この下書きの仕事が、最も手間がかかり、テーマによっては四〇〇字詰原稿用紙三〇〇枚から五〇〇枚におよび、苦しい作業でしたが〝こうしてこそ事実を正確に整理できる〟との藤崎先生のお言葉に導びかれ、助けも借りながら、進めました。

ちょうど、登山のときにはじめみえていた頂上がみえなくなる、坂がきつくなる、息はきれてくる、という状態のなかでリーダーが地図を示しながら案内してくれるようです。ときには、リーダーに背おってもらってやっと登った坂もありました。

この下書きのなかで、重要と思われる箇所のみをのこし、文章を整理し、これをまた原稿用紙に書きうつしました。これを会員に回覧して意見をきき、また書きかえ、この作業を何度かくり返してぜい肉をおとし、内容を煮つめてゆきました。直接執筆しない会員も企画からはじまり、下書きや清書まで手伝い、検討や編集に参加し、みんなで作りあげました。

この作業のなかで、なんでもないようにみえる一枚の書きつけが、何十枚もまとまると一つの流れを示し、なにげない婦人の発言が事態の本質に迫っていることがわかりました。（中略）

まったく素人の私たちなので手違いも多く、二葉印刷さんにはとりわけ御迷惑をおかけしましたが、このようなりっぱな本にしていただいて、心からお礼申しあげます。

また、とくに、会員の家族・職場の方がた、友人のみなさんには、長期にわたって不便をおかけしました。藤崎先生の奥様には、とくに、いろいろの御苦労が多かったことと存じます。きょうこの本をおめにかけることができましたことに免じお許し下さるよう、心からお願い申し上げます。

これからは、この本を一人でも多くの方がたにみていただく仕事が残っています。（中略）従来同様御協力を賜わりますようお願い申しあげます。

次に篠崎勝が

「藤が咲く野に住むひとをたずねゆく」

「石楠花の谷に一縷の径かかる」

「さざなみのえひめを語れ波の子よ」

と祝句を朗読し、つづいて、宇和島のサークル「草の芽」の代表水野政子、愛媛大学学長芦田譲治、愛媛母親連絡会会長藤井アヤメ、愛媛新聞社上甲克己、愛媛婦人少年室長福田百慈、松山商科大学人文学部長伊藤恒夫、新日本婦人の会愛媛県本部会長重松いちが、それぞれお祝いのことばを述べた。ついで篠崎量子がお祝いの鼓（謡曲「羽衣」）を、水本羊子が琴（「春の光」）をそれぞれ演奏した後、近代史文庫主事古谷直康の音頭で乾杯を行なって第一部を終わった。

第二部は、サークル会員和田満智子作の「女性史サークルの二〇年によせて」と題する次のような詩の朗読（朗読者阪本敏子）ではじめられた。

女性史サークルよ
あなたが生れて二十年
いま　あなたは
そのしなやかな体にエネルギーをもやして
少年期から　青年期への歩みをはじめた
ここに集う人たちの支えと　まなざしが
女性史サークルよ
あなたを育ててきた

一九五六年一月二三日
MSAだ　仕分制教育だ　勤評だと
反動の黒雲が　たちこめる中で
松山市の先生たちは
「しっかりとした学習が
仲間づくりが必要だ
社会発展の道すじを学びたい」と
東雲小学校で　教育会館で　生協で
月曜日ごとの学習をはじめた
テキストは「日本女性史」

つまりあなたは
学校の教師たちを父とし母として生れ
銀行員や公務員、学生や三越・五色そうめんに勤める
人たちや、主婦
こうした仲間、二〇〇人をこえる人々の手で育くまれ
ています「二十才」の娘となった

女性史サークルよ
あなたは知っている
そのからだに刻みつけてきた歴史の足どりを
勤評の強行を　それとたたかった教師たちの姿を
母親大会の発足と　こんにちまでの母親うんどうを
松川事件や警職法　安保をたたかった仲間たちの姿を
保育所づくりをすすめた若いお母さんを
原水禁　平和の運動を
ベトナム戦争反対のうんどうを
給食費や教育費の父母負担軽減の運動を

そう　あなたは
あなた自身が
この二十年にわたるエヒメの婦人の歩みの中で

ともに生き
ともに学び
ともに成長して
一人前の"娘"となり
今日　成人式をむかえた

そして
今日　ここに二十年の記念碑として
『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』を
世に送りだしたあなた！

女性史サークルよ
あなたの中に集い来たりし仲間は
教師は教師として
学生は学生として
勤労婦人は勤労婦人として
主婦は主婦として
それぞれの個性を生かし　才能を花ひらかせ
それはまるでオーケストラのように
バイオリンやコントラバスをひく人も
タイコや笛を吹くひとも
フルートやピアノを奏でるひとも

ただ一度きりのテンパニーを打つ人も
ひとつになって
壮大な曲目
歴史的叙事詩を奏でてきた二十年だった

女性史サークルよ
あなたは二〇〇人の仲間たちの魂のよろべとなり
「歴史の流れを正しくつかみ　物事の本質を」教え
その悩みをききよろこびを分ち
今日をよりよく生きる道標として
そして　さらに
「来るべき世界を準備する」ために行動にたちあがら
せつつ
今日からの
青年期にふさわしい歩みを
いま　またはじめようとしている

女性史サークルよ
たくましく大きく伸びよ
一歩　また一歩
たしかな足どりを刻んで――
すべての婦人の心の灯台として
火をもやしつづけよう

つづいて、松山文化団体連絡協議会代表坂本忠士、自治体問題研究所理事長黒田幸弘、愛媛民主教育研究所理事長笹田徳三郎がそれぞれお祝いのことばを述べ、ついで水本洋子・池田せつ・渡辺奈緒・栗原麻紀が箏曲「六段」を演奏、川又美子が日本舞踊「鶴亀」を舞った。その後、テーブルスピーチがひきつづき行なわれ、共産党県委員長井上定次郎、自治労県本部尾上正一、母親連絡会草地喜代野、近代史文庫島澤豊幸、劇団「こじか座」畑野稔、愛媛大学向井康雄、共産党県委員会中川悦良、松山子ども劇場池田宏、サークル会員立田淳夫、山下満政、中嶋美代子などがそれぞれ歌の披露なども交えてお祝いのことばを述べた。この間、参加した子どもたちによる「手のひらに太陽を」の合唱と踊りなどもあり、祝賀会の雰囲気は、ますます和やかに、楽しく盛り上がった。ついでサークル会員が「花」を合唱した後、篠崎勝、篠崎量子に対して花束を贈呈し、野本ツタ子が

参加者に対しておれのことばを述べた。最後に参加者全員がひとつの輪をつくって、「赤とんぼ」「おぼろ月夜」などを合唱して会を閉じた。

『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』が刊行されて後、この本に対する各方面からの反響が数多くあったが、五月二一日付愛媛新聞は、「戦後の体験克明に　松山在住の婦人ら〝手づくり〟の女性史」と題して、次のように報道した。

（上略）この本は、（中略）松山在住の婦人らの協力によってできあがったものである。しかもその土台になったのは、二十年間の学習・研究活動である。つまり、文字どおり〝手づくり〟の労作なのだ。

女性史サークルは、三十一年に誕生以来、働く婦人、主婦、教師、学生らが週に一度集まって、女性史を中心に研究を続けるとともに、「育児・教育・物価などを通して、極く身近に起る社会の不合理や矛盾について語り合ってきた」（著作のあとがき）。その努力の跡を〝形〟にすること、活動や関心を寄せてきたことがらの経過・背景を正確にとらえ、伝えておくこと―

『三〇年の歩み』刊行は、こうした動機に沿って、資料収集と事実の証確を主にしてきとめられた。

例えば「敗戦直後の公娼と婦人の政治意識」（執筆野本ツタ子）。〝二合一勺麦配給時代〟の県下の動静が実に丹念に記されている。（中略）

また婦人参政権を与えられて、とまどいや不安を語る多くの女性らも紹介されている。女性の政治意識、水準を示して興味深い。（中略）

確かにこの本は、福・著者がいうように、戦後三十年の歩みを総合的に記述したものではないかもしれない。しかし（中略）各テーマで報告されている多くの貴重なデータは、ほぼ本県の戦後女性三十年史、といってもよいのではなかろうか。

歳月の重みは体験を風化さす。戦後、平和を守り、女性の権利を高める広範・活発な運動が行われてきた。そうした体験を風化させないために記録しておく、というそのことに、体験の十分な手ごたえ、自信といったものを感じさす。と同時に、そこに三十年間における県下女性の成長ぶりも知るのである。（下略）

また、宇摩郡土居町の篠永公子（元県教組婦人部長・「松山よりよい保育所をつくる実行委員会」委員長

五月二五日付川又美子あてはがきで、次のように書いている。

「まあ、大変な記録が出来上りましたね。最初に計画の段階を伺って想像しておりましたものとは余りに違った素晴らしさに驚き、且感動いたしました。（中略）『論評をさけ、具体的な事実に即して愛媛の婦人のなまの姿を明らかにする』、これより外に、真実をうったえる方法がありましょうか。その炯眼によって捕えた資料を、どのように位置づけて、愛媛の婦人の歩みの力強い足音として脈打たせていくか、編集者の皆様の卓見に頭の下る思いです。（中略）本当に御苦労さまでございました。飛んで行って手をにぎりしめたい思いです。（下略）

愛媛婦人少年室では、「婦人の地位向上に関する懇談会」を六月一五日に開催することになり、五月二七日付で女性史サークル代表者にあてて『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』について報告を依頼してきた。サークルでは、川又美子が報告することをきめ、その報告内容について検討、重ねた。六月一五日午後二時から、川又美子が、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』の内容にそって、「子どもと教育」、「くらしと権利」「平和の問題」の各分野にわたる戦後の愛媛の婦人の歩みと現状、その問題点と今後の課題について、三〇分間報告を行なった。

つづいて歴史教育者協議会では、八月一日～三日、名古屋市で開かれる第二八回全国大会の第一分科会での報告を、女性史サークルに求めてきたので、サークルではその検討を行なうなかで、発表者を二宮敏子にきめ、七月二六日、その報告内容を検討した。

八月一日に松山市で開かれた「第一九回えひめ母親大会」では、参加者に『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』を頒布した。

翌二日、歴教協全国大会に、篠崎勝、二宮敏子、池田せつ、工水戸富士子、川又美子が参加し、第一分科会で二宮敏子が報告した。（

分科会討議の中では、この報告に基づき、「地域の堀

りおこし」の観点から、サークルの活動、研究内容等をめぐって、質問や活発な意見が出され、会員もその討論に積極的に参加した。

八月三日夜、宿舎のステーションホテルで、愛知女性史研究会の伊藤康子、近田澄江、中西静子、脇田順子の四名と懇談会をもち、交歓した。この時、愛知女性史研究会が七五年一一月刊行した『愛知女性史年表』の寄贈をうけ、サークルからも、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』を贈呈した。このあと八月九日付で、伊藤康子から、川又美子あて、次のような書簡が寄せられた。

（上略）『愛媛の婦人戦後三〇年のあゆみ』たしかに受けとりました。まだ完全には拝見していないのですが、史料をこれまで丹念にとられたエネルギーの根元みたいなもの、すごいと思います。それが叙述になりきっていないようで、もったいないと感じたりもしています。あのかえり、みなが申しておりましたのは、「二〇年の重み」でした。愛知でも、その重みみたいなものを、これからつくりあげていこうというわけです。（下略）

こうした各種の集合や会合への参加、報告活動などを行なうなかで、会員はそれぞれ、『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』の頒布にも努力を傾けた。このような出版に伴う諸活動が一段落したところで、八月三〇日、今後の学習計画をたてることについて話し合い、九月六日、次のような計画をきめた。

戦後三〇年の歴史を左記の図書を参考資料として戦後三〇年の歴史を各時期ごとに学習する。

伊藤康子『戦後日本女性史』
愛媛地評『愛媛地評十年史』
藤田征三『愛媛の女性百年』
今井瑠璃男『愛媛県政二十年』
愛媛民研『愛媛の民主教育戦後三〇年の歩み』

昭和二〇年八月～同二二年一月（チューター　池田せつ）
〃　二二年二月～同二三年一二月（〃　工藤富子）
〃　二四年一月～同二五年六月（〃　川又美子）
〃　二五年六月～同二七年四月（〃　栗原美令子）
〃　二七年四月～同二九年一二月（〃　三宮満子）

九月一三日、『愛媛地評十年史』、『愛媛の民主教育

戦後三〇の歩み』、『愛媛の女性百年』の輪読学習をはじめ、一〇月一二日には『資料戦後二〇年史（政治）』、『愛媛県政二〇年』、『日本現代史上』、『愛媛県戦後一五年略史』などを参考に学習、一一月八日、『戦後日本女性史』の学習を行なうなかで、キリスト教婦人矯風会野本千代、農協婦人部神野久子、「松山婦人大学協会」、「松山婦人民主クラブ」などについての聞き取り調査や資料収集をはじめることをきめた。一二月六日、前日に投票の行なわれた総選挙の結果について学習を行なった。

一九七七年に入り、一月二二日に、月曜会・火曜日合同で新年会を開き、約一〇名が参加して歓談する中で、かねてからの懸案であった、サークル機関誌『むぎ』の再刊について、企画の大要をきめた。一月二四日には『戦後日本女性史』、一月三一日には『地評十年史』、二月二一日と二八日には『愛媛の女性百年』の、輪読学習をそれぞれ行なった。なおこの間、松山勤労者山岳連盟から、二月五日・六日、松山市御幸会館で開催予定の労山四国ブロック「女性のつどい」の基調講演を依頼され、サークルで相談の結果、川又美子が担当することとなった。一月中に「女性のつどい」実行委員会のメンバーが二度にわたってサークル例会に参加して交流した後、サークル会員で講演内容を検討し、二月六日、川又美子が「愛媛女性史と和の三〇年」と題して、一時間、講演を行なった。

付　記

『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』に、「女性史サークルのあゆみ」（かわもと・けんじ）として、一九五六年一月から一九七五年一〇月までの活動の概略が所載されていますので、本稿では、それ以後、本年二月までの歩みを記述しました。本稿は、サークルの記録ノート・スクラップその他の資料に基づいて、サークル全体の歩みと月曜会の歩みを中心に、篠崎・川又が概要をまとめ、それをサークル全員が検討し、まとめました。

火曜会のあしあと

『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』出版記念会が盛会に行なわれた後、高まったこの熱を、次への歩みの原動力にしようと、同書をテキストに学習会を開始した。

五一年

六・二一『愛媛の婦人――』の中の「女性史サークルのあゆみ」を輪読。各年代を回顧し、時代の動きを話し合う。また、『むぎ』再発行の件も話題にのぼる。
新入会員――水本羊子、藤村重美

七・六 テキスト輪読。
「敗戦直後の生活と婦人の政治意識」一、生活難①食べること

七・一三 同右②衣料その他③住宅
「敗戦直後……」は二回で終了の予定であったが、思ったほど進まない。ゆっくり、地道に活動しようと話し合う。

九・七 同右二、婦人の政治意識
敗戦直後の政治に対する関心と現在のそれとを比較。特に教育問題に話題集中。

九・一四「愛媛の消費者運動」全員輪読

九・二八 四八年のオイルショック以降の消費者運動について話し合う。また、篠崎先生より韓国旅行の土産話を伺う。

一〇・五「市政と婦人」輪読・話し合い。
一、敗戦から復興へ ④教育

一〇・一九 破部へ秋のバイキング

一一・二「市政と婦人」Ⓑ福祉、輪読・話し合い。

一一・九 同右、二、市政への要求と行動の芽生え。
Ⓐ教育、輪読と話し合い

一一・一六 同右Ⓑ福祉、輪読・話し合い

一一・三〇 同右、三、市政への要求行動のたかまり Ⓐ教育 Ⓑ福祉・輪読・話し合い。

五五二年

一・一八 学校教育・家庭教育について語り合う。子供を育てる真剣さと自分の信念を貫き通す厳しさを確認し合う。

一・二五 今井さんの長男武君を中心とした『親の目・子の目』制作で、火曜会メンバーも出演協力。テスト主義と家庭教育についてなど、

文庫でビデオ撮り。

二・一　亀田さん、愛媛新聞「主婦のおしゃべりタイム」に登場のため、文庫で記者の取材を受ける。

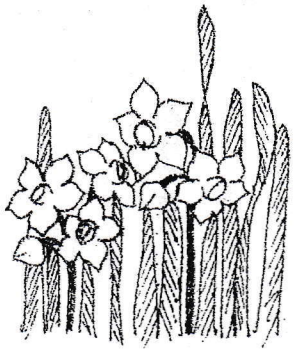
二・八　亀田さんの記事について、反響など話し合う。

川又さん、二月六日の「勤労者山岳連盟」女性の集いで講演された様子を話して下さる。

二・二五　「おしゃべりタイム」の記事と教育問題について語り合う。

「むぎ」復刊の原稿〆切日

（影山　記）



女性史サークル

『愛媛の婦人戦後三〇年の歩み』

頒価　二、五〇〇円

送料　二〇〇円

連絡先　松山市余戸町　一三一四ー二　谷本　純子

家族史研究会（熊本）女性史研究所

会員は両者で二〇人位。郷土の高群逸枝に学びつつ、外国の文献も探っている。

『家族史研究』　第四集まで出版

一冊　五〇〇円

送料　一二〇円

友をもとめて

山本　紀

人という字は、互いにもたれあっているという意味だと教えられたのは、いつだったろうか。戦後の教育の中で、どうまちがえたのか、私の中には、〝自分こそが〟という気負いだけが強くなって、いつの間にか〝はしにも棒にもかからぬ小生いきな娘〟に成長していた。ある時、彼にあってずいぶんびっくりさせられた。私はすぐに、〝All right〟と物事を決めつけ、一寸うまくいかないことは、まわりから、心の中から意識的に抹殺して生きていた。ところが彼は、少々悪くみえる事態にもたじろがず、何とかいいところをすくいあげようとする。（何とかは盲目、あばたもえくぼかと冷笑するなかれ）そんな彼とどういうわけか結婚して、はじめのうちこそおとなしかった私も、〝三つ子の魂〟じゃないけれど、自己をそう簡単にはひっくりかえせない。子供も三人となり、親の力ではおさえきれぬギャング達に成長しつつあり、頭にくることの多いこと。世の中見まわしても腹の立つことばかり。家事と育児と家計に圧迫されながら、おとなしく家で本を読んでささやかに楽しんでるだけでは何か満たされぬ思いで息苦しくなってきていた。八方ふさがりの思いをいらいらと子供に彼にあたりちらして人生が過ぎて行くのはあまりにむなしい。共に語りあえる友がほしかった。そんな時に、この会に参加させてもらえたことが本当に嬉しい。怠けものの私がどこまでついていけるか内心心配であるが、心して自分を変える努力を続けようと思う。

あとがき

「むぎ」二〇号ができました。予定をはるかにすぎて二年かかりました。前号よりじつに八年の空白がありましたが、これを機に今後年二回の発行をめざしたいと、サークルで話しあいました。

サークルの前進の中でみんなの力を集め、「むぎ」を育てていきましょう。

谷本純子

むぎ
発行　一九七九年三月
編集　女性史サークル
連絡先　愛媛県伊予郡松前町恵々美八一九
松前合同宿舎二一三三
谷本純子